

身体表象文化学専攻（博士後期課程）

1. 教育研究上の目的

身体表象文化学専攻は、現代のイメージ芸術（主に舞台芸術、映像芸術、マンガ・アニメーション）に関して総括的な知識と歴史的展望とを有し、専攻分野の研究対象に対して批評的一貫性のある分析を遂行し、それに基づいて現代文化について確かな意見を発信し、社会的な行動へと結びつける能力を持つ人材を養成する。

2. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

身体表象文化学専攻（博士後期課程）では、履修規定に即して必要単位を修得し、必要な修業年限を満たした上で、下記の能力を備えていると判断した場合に、「博士（表象文化学）」の学位を授与します。

（知識・技能）

1. 舞台芸術、映像芸術、マンガ・アニメーション、身体表象文化論、身体表象文化史の5つの分野のうち1分野に関して、広範な知識を身につけ、とくに自身の研究の主題及びその周辺の学術成果を把握している。
2. 自身の専攻する分野及び研究する主題に関して、長文の論文をまとめ、不特定多数の知的聴衆に向けて講演を行うことができる。

（思考・判断・表現）

3. 自らの研究で得た知見に基づき、様々な形での意見表明や教育活動への関わりを行うことで、社会に貢献することができる。

（関心・意欲・態度）

4. 自身の専攻する分野について包括的な専門知識を修得し、方法論的検討をしつつ特定の専門的研究テーマに取り組む意欲がある。
5. 自らの研究で得た知見に基づき、より大きな社会的・文化的問題について積極的に取り組む意欲を持っている。

3. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

身体表象文化学専攻（博士後期課程）では、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）に掲げた能力を修得させるために、以下のような内容、方法等に基づき、カリキュラムを体系的に編成します。

（教育内容）

1. 舞台芸術、映像芸術、マンガ・アニメーションにおいて、それぞれの専門分野におけ

る基本的な知識を習得し、独自の研究を深める視点を獲得するため、「舞台芸術文化論演習」「映像芸術文化論演習」「マンガ・アニメーション芸術文化論演習」を配置する。

(知識・技能)

2. 身体表象文化の研究において不可欠なジェンダー研究の基本的な概念・アプローチを習得し、様々な社会・文化現象をジェンダーの視点から分析・説明する力を身につけ、それを応用・発展させるため、「身体表象文化論演習」を配置する。(思考・判断・表現)
3. 身体表象の概念と歴史を身につけ、それを応用・発展させるため、「身体表象文化史演習」を配置する。(知識・技能)
4. 身体表象の制度的な枠組みを研究し、それを社会的な実践に役立てるため、「表象文化制度論演習」を配置する。(思考・判断・表現)
5. 舞台芸術、映像芸術、マンガ・アニメーションにおいて、それぞれの専門分野における応用能力の開発及び批評技法を習得するため、「舞台芸術批評研究」「映像芸術批評研究」「マンガ・アニメーション芸術批評研究」を配置する。(知識・技能)
6. 学生が博士論文の作成について必要な知識や技能を修得できるように、「博士論文指導」を必修科目として配置する。(思考・判断・表現)
7. 高度な専門知識を修得するため、他大学院研究科との相互交流協定を通じて相互の履修及び単位の修得ができ、学外の研究機関の設置する課程・研修会等の履修により設定された単位の履修を認める。(関心・意欲・態度)

(教育方法)

1. 講義科目では、幅広い知識を修得させることを目的として、講義法を採用する。
2. 演習科目では、学生自身のプレゼンテーション及び論文作成能力を向上させるため、アクティブ・ラーニングを取り入れた演習を採用する。
3. 指導教授が、きめ細かな研究指導や論文執筆・発表の指導を行う。

(教育評価)

1. 知識・技能の修得に関しては、博士論文による研究成果の審査を通じて評価する。なお、その審査にあたっては、別に定める審査基準に基づいて、総合的に判断する。
2. 講義科目において、具体的な問題に関する報告及び討論を行うなかで、論理的かつ科学的な説明を行う能力、十分に根拠づけられた説得的な議論を構築する能力、及び他者との議論の中で妥当な結論を導いていく能力を測る。
3. 指導教授による演習科目において、自らの知識と思考を用いて具体的な問題を検討し、解決しようとする姿勢と能力を測る。そして、博士論文の審査を通じて、より専門的な学問的能力についての評価を行う。

4. 入学者受入れの方針 (アドミッション・ポリシー)

身体表象文化学専攻（博士後期課程）では、次に掲げる知識・能力や目的意識・意欲を備えた学生を、各種選抜試験を通じて受け入れます。

（知識・技能）

1. 舞台芸術、映像芸術、マンガ・アニメーション芸術、ジェンダー文化論の4つの分野のうち1分野に関して、専門的な知識を身につけるとともに、自身の研究主題とその周辺の知的領域について深い思考を有している。

（思考・判断・表現）

2. 専門的知識と広い文化的関心とをバランスよく示す文章作成能力を持ち、適宜、必要十分な長さの論文を書くことができる。
3. 扱う主題に関して従来 of 諸研究とは異なった視野を開く独創性を持っている。

（関心・意欲・態度）

4. 専門的問題の特殊性に自足することなく、自身の論題を普遍的な文化の問題として同時代の読み手に向けて発信する開かれた精神的姿勢を持っている。

以 上